

## カント批判哲学における「判断力」について

—— 規定的判断力 と 反省的判断力 ——

荒井正雄

### I、カント哲学の西欧思想史における位置づけ

17世紀西欧の「マウンダー極小期」（17世紀中頃～18世紀初頭）は、太陽活動の衰退期であって、農産物の停滞、食糧不足による飢餓、ペストが流行した気候的空間——「危機の時代」であった（櫻井邦朋『太陽黒点が語る文明史——「小氷河期」と近代の成立』中公新書）

17世紀の危機的時代から18世紀の活動的時代へ方向付けて、——思想的な「ピュロン主義的危機」の時代から18世紀の合理的で活動的な世界へ方向付けた思想家の一群が、イギリス経験論に属するベーコン、ホブズであり、西欧大陸の合理論形成に貢献したデカルト \*1、スピノザ \*2 等の「預言者」であった（哲学会誌『哲学と教育』第66号掲載の拙論で採り上げた「第二回 マウンダー極小期に『近代化』の世界像を思索した哲学者」を参照）。

\* 1 デカルトの「考える私」とカントの「認識主観」Ich denke）—— 研究者の解釈について

- (1) 「疑う思惟の働きにおける純粋知性としての性質のみに注目すれば、デカルトのコギトをカントの Ich denke に無限に接近させて解釈することも可能となってくる」、と伊東勝彦は、「疑う思惟の働きは、たんなる純粋知性の働きでない」とした上で、指摘している（伊東勝彦『デカルトの人間像』哲学思想叢書 勁草書房）。
- (2) ジャン・レクロワは、カントの「われ思う」は統一の形式であり、デカルトのそれは、疑うことの出来ない「自己を実体」と解釈することから、カントとは根本的に異なる、と結論する（ジャン・ラクロワ『カント哲学』クセジュ文庫 白水社）。
- (3) 明治以降の日本哲学界を代表する西田幾多郎は、「カントの自覚的自己は、デカルトのそのの如く、それ自身によって有る実体ではない」と解釈する（『西田幾多郎全集』第11巻、岩波書店）。
- (4) 小林道夫は、カントの主観における「対象構成の観念的手法は、思想的に……デカルトの論議を洗練して発展させたもの」と指摘する（小林道夫「デカルト形而上学の機能構造——観念論から実在論へ」『思想』1996年11月号）。
- (5) 「デカルト哲学にはカント的な認識論が胚珠として存在する」、と京都帝国大学教授 朝永三十郎は、デカルトとカントの理論的関連性について指摘している（朝永三十郎『デカルト 省察』岩波書店）。
- (6) イギリス近代経験論の伝統を受け継ぎ、ハーヴァード大学で結成した「形而上学クラブ」で能動的な経験論（プラグマチズム）を展開したC・S・パースは、「毎日二時間ずつ三年以上を費やして、全部を暗記してしまうほどカントの『純粋理性批判』の研究に没頭し、その各章すべてを批判的に検討した」と言う（Selected Writings, ed, New York, 1966）。パースによるカント批判の一例を挙げておく。

時間が形式であること、すなわち法則の性質をもつものであって、現存物ではないことを私は疑わない。また時間は一つの直観であり、同時に一つの唯一の対象でもあり、また内的世界との特定の結びつきをもつことも疑わない。しかしカントが時間のそれらの三つの性質の相互の結びつきを正しく述べことに成功したかどうかは大いに疑わしい（『パース 論文集』第6巻 96パラグラフ 略記 CP5—96）。

\* 2 自由主義者（スピノザ主義者）とカント

スピノザ主義とカントが全面的な対決をしたのは、『実践理性批判』を執筆する段階であった、スピノザ主義の哲学的挑戦（認識主眼の否定）を受けたカントは、以下のように述べている。

ひとが時間及び空間の観念性を受けられないならば、残されるのはスピノザ主義だけであって、スピノザ主義では、空間と時間は根源的存在者（引用者註：神）そのものの本質的規定であるが、この存在者の依存する事物は（それゆえにわれわれ自身も）

気候的危機の時代を生きるためのピュロン主義的な生活は、無神論的快樂、懐疑主義の世界であった、デカルトは、「考える私」を疑うことの出来ない明晰判明な知を哲学の第1原理として提唱した、この明証性による「懐疑論（引用者註：ピュロン主義）との対決は、近代哲学の形成にとって決定的な役割を果たした」のであった（佐々木カ「くわれ推う、ゆえにわれあり」の哲学は、いかんにして発見されたか『思想』1987年10月号）。

カントの認識主観における「対象構成の観念的手法」は、思想史的に「デカルトの論議を洗練して発展させた」（小林道夫「デカルト形而上学の基本構造——観念論から実在論へ——」『思想』1996年11月号）と位置づけられる、とすれば17世紀の「懐疑論の危機」を契機としてカントは、人間学的認識論を形成したが、このことによって、彼は、思想上、近代市民社会の人格形成に大きな役割を果たしたのであった。

17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパは、遅塚忠躬の言葉を借用していえば、「死神からの解放」の時代であった、思想家たちは、「社会のあり方から人びとの生き方や心の持ち方に至るまで、すべて革命的にかえて」しまったのである（遅塚『ヨーロッパの革命』講談社）。

## II、カントの批判哲学には、「二重の視点」がある —— 渡邊論文のテーゼ ——

哲学とは「人間とは何か」という「問い」に答えることである、とカントは定義付ける、ルソーの「自然状態と文明社会」観によって「独断の仮眠 まどろみ」から目覚め、カントは「人間論」を展開した、——ハンナー・アーレントも指摘している、カント自身の新しい哲学探究（啓蒙主義）の姿勢を踏まえて、カントの考究には、「二重の視点」が必要であると、渡邊論文は、強調する。論評者が、大変勉強になった提言である。

ではカント批判哲学の「二重の視点」とは、どのような哲学的視点であるか、以下「A~B」で渡邊論文を辿りながら確認しておきたい。

### A、カント批判哲学の解釈 —— 基本的視座＝二重の視点について

「独断の仮眠」から呼び戻してくれたヒューム哲学の「経験」を理性認識に置き換えた哲学書『純粋理性批判』は、「個物には自由は無い」と主張するスピノザ主義（代表的人物：J・G・ヘルダー）からの挑戦的批判を受けた、K・L・ラインホルトが、『カント哲学書簡』の中でカントを「リベラルな有神論として擁護」したことが『純粋理性批判』に対する「長いあいだの沈黙」を破って「価値を高め」「カント哲学の意義を始めて決定的なものにした」とされる。

カント哲学の「われ思う Ich denke」は、「統一の形式」（構想力）であるが、「現象界の認識主観」であると同時に自然法則に従属しない「理性的主観」であり、道徳法則の目的の国＝「自由」を求める、——渡邊論文が主題とする「二重の視点」である。

1789年9月21日付けのガルヴェ宛の書簡でカントは、「純粋理性の二律背反」につき、次のように言及している。

私の出発点は神の存在や不死の考察などでなくて、純粋理性の二律背反でした、……第四の二律背反、すなわち<人間は自由である、自由でない、人間における一切は自然必然性をもつ>に到るものです。この二律背反は、私を初めて独断の仮眠（まどろみ）から呼び戻し、理性そのものの批判に向かわせたものです（玉井茂『感知の散歩——哲学者のティータイム——』からの再引用 勁草書房）。

「正命題 — 反命題」（～である — ～でない）の矛盾は、「理性が経験の範囲外に逸脱するためにこそ起こる仮の矛盾で」、「後の弁証法的思想の発展に重要な役割を果たした」、と言う（『哲学事典』平凡社）、「独断の仮眠」から目覚めた結果が、『純粋理性批判』の執筆の契機となったとすれば、「純粋理性の二律背反」——自然界と超自然界の分離（裂け目）と総合は、カント批判哲学の「哲学の革命」＝「コペルニクス」と深く関わっている、「物自体と現象界」「自然界と叡知界」の「二重の視点」と読めるのではあるまいか（cf. 「B」）。

カントの人間学の根幹である認識主観 —— 純粹で、実践的な理性を認めなかった18世紀の新スピノザ主義を踏まえて、渡邊論文のテーゼを簡単に図式しておきたい。

## 第一図 渡邊論文の提言 —— 『批判書』の重点的解釈は、「二重の視点」

### a、『純粹理性批判』

「二重の視点」Ⅰ 可感界 …… 対象が私たちの認識に従って規定される哲学＝理論哲学 (渡邊論文、規  
定的判断)

#### α・先験的客観の認識について —— 論評者の解釈

素材 (表象) → 感性 (時間＝内官の係式・空間＝概官の形式) → 悟性 → (統覚の統一) =自然科学的世界の構成  
|| ||  
(受容性) (自発性) =対象の構想力

空間と時間が、直観の主観的形式であれば、あるがままの「物」と認識し思惟する主観によって見る世界とは「区別」  
される (根本和幸訳、S・ケルナー『カント』みすず書房、1977年)。この指摘は、渡邊論文の重要なテーゼ「二重の視点」  
と解釈でき、論評者が、感じたことが既にケルナーによって指摘されている。

自然の中に実体としての統一体を見出すのは、認識主観としての人間である (小倉志祥『カントの倫理思想』『批判哲学の世界  
観』)。自然を統一する最高の立法は、「自然の最高立法者としての人間理性 (引用者注：純粹理性) である」(前書)。

### b、『実践理性批判』

「二重の視点」Ⅱ 叡智界 …… 「自由概念の原理」にもとづく理性の立法の哲学＝純粹実践哲学 (反  
省的判断)

\* 補足 『道徳形而上学原論』「第一章 道徳に関する常識的な認識から哲学的な姿勢認識への移行行き」  
理性的存在者はすべて、各自が自分自身と他の一切の理性的存在者とを決して単に手段としてでなく常に同  
時に目的として取り扱うべきであるという法則にしたがっている……。理性的存在者の体系的結合即ち国 (目  
的の国) を成立させる。(篠田英雄訳 岩波文庫)。

・定言的命令は、人間の行為の格率 (主観的原理) が一般的法則 (客観的原理) になるよう我々に命令する (自律的)。

\* 補足 定言命令は、「可想界の私 (人間) に一切の行為は常に意志の自律に従っている」ことを要請する命法であるが、同時  
に「感覺界の一員であることから、私 (人間) の行為は意志の自律に従うべき」だ、という命法となる (括弧内、引  
用者) (『道徳形而上学原論』「第3章 道徳形而上学から純粹実践理性批判への移行行き」)。

・「道徳」を「神の命令」とすれば、倫理は、「他律的」である。

#### β・論評者の解釈

叡智界 …… 可感界を成立させる「物自体」(本体「自由」の保障)の世界

カントは、「私」(理性的存在者)は自然法則に従属しない「行為的主観」(道徳的決断の担い手)と考  
える。即ち人間の利益・欲望などに限定されない道徳法則 (道徳の最高原理＝定言的命 令 ～せよ)に従って  
決断する「自由な存在」と考える、——理性 (実践理性)によって考えられる物自体の世界である。

γ・和辻哲郎は、自著『カント実践理性批判』「本論 実践理性批判」(『和辻哲郎全集』第九巻 岩波書店)で、  
道徳法則の「普遍的形式」について以下に記載するような説明をしている。

不思議なことには学者たちが自己幸福の原理のごとき他律を振り回している。そうして人を説得するために普遍的  
幸福というごときものを持ち出してくる。なるほど人はすべて本性上幸福を欲するのであるから、普遍的幸福は  
客観的実践的原理たりうるのであるが、しかしそれは幸福が意志を規定するのではなくその普遍的形式が意志を規  
定するからである。自己の幸福よりも人類の福祉の方が貴いなど言うことは幸福自身からは決して出てこない(「第  
一部 純粹実践理性の原理論」)。

渡邊氏からは、第一図の、評論者の解釈に対して批判的で且つ理論的な指摘を受けた。次のとおりである。

人間の悟性認識 (自然科学的認識)の全過程の概略は、次のように表現できる。

「物自体」によって触発された感性が受容した諸表象を、悟性が概念を使って思惟し総合 (結び付ける)するが、それ  
を総合するのは自己意識 (統覚)である。

カントが描いた「新しい形而上学」の見取り図である「批判哲学」の叡智界と可感界の二元論について、渡邊  
論文は、極めて重要な解釈上の違いを以下のように指摘している。

叡知界と可感界とは、まったく別個の世界が二つ実在するというのではなく、「二重の視点」、つまり考察の視点の方向（ベクトル）の違いに置いて捉えられるのである（渡邊論文）。

上述の渡部論文が強調するテーゼ「考察の方向」は、第二図のようになる。

## 第二図 第一及び第二『理性批判』における「二重の視点」

叡知界と可感界の「二つの世界」は、視点（ベクトル）の違い

- a、『純粹理性批判』—— (1) 「理性」＝①理性的認識と②道徳に関わる実践理性の働きが基本であることから、区別された自然と理念の世界は、本質的に同一であり、矛盾しない。（『岩波 哲学小辞典』）  
(2) すべての認識は、経験と共に始まるが、すべての認識が、経験から生ずるのではない。（小倉志祥『カントの倫理思想 「道徳の最高原理への道」』）  
つまり「認識が対象を規定する」カントの新しい認識論は、物自体の世界と共存するのであって、カント批判哲学の、一つの基本命題である（前掲書）。
- b、『実践理性批判』—— (1) 経験における感性と悟性の、つまり自然界を包摂し、理性の対象である叡知界が対象として考察される（渡邊論文）。

・渡邊氏の提言： カントは、すくなくとも『純粹理性批判』の後半部において叡知界における「自由」の可能性を証明した。

以上の理論を踏まえて言えば、カントは、自然界を正しく認識する理論哲学（理論的理性）と目的の国を目指す実践哲学（実践的理性）に区分し、『判断力批判』『第二序論』で「裂け目」があると言及する、が、二つの「批判書」は、共に理念（＝理性）の世界を研究対象とすることから、自然界と道徳界を同一本質としてカントは、総括する（cf. 下記の『道徳形而上学原論』）。

ともあれカントは、『判断力批判』において第一、第二の「批判書」が説く「自然と自由」の裂け目を調和するア・プリオリな原理（先験的な原理）を明らかにした、カントによる「哲学の革命」は、新しい啓蒙主義による形而上学の再建であり、その意味で渡邊論文が、提言する「二重の視点」ではないか。

カント批判哲学の体系は、実践理性が全自我の統一者であり、意志的・人格的理性に最高の位置が与えられた。対象の側に置かれた最高のものを主体の奥に見出すという「考え方の革命」であって、哲学上のコペルニクスの転回が行われた（『岩波 西洋人名辞典』『カント』、山崎正一『カントの哲学』）。

（人間の能力（判断力）は、）「自分を他の物から区別するばかりでなく、対象によって触発される限りの自分自身からも区別する」「理性である」。「悟性が自分の能動的活動によって作り出すものは、感覚的表象を規則のもとに統括してこれらの表象を一つの意識に統一する用をなす概念にほかならない、…… 理性は、感覚界と悟性界を区別し、またこの区別によって悟性にもその限界を指示（する）、理性の最も重要な仕事がある……」（括弧内引用者）（『道徳形而上学言論』『第三章 道徳形而上学から純粹実践理性批判への移行行き』） 岩波文庫版。

啓蒙主義の実現に遅れた近代ヨーロッパの後進国——「文明以前」のドイツにカントは、「哲学革命」を注ぎこんだ、『純粹理性批判』に始まるカントの批判哲学——「哲学に関する革命」（考え方の革命）は、イギリス経験論の、特にデイヴィッド・ヒューム \* 3 の経験論と、「自然感情のうちに内面的・主体的人間を掘り起こした」啓蒙主義の批判者である J・J・ルソー \* 4 の「人間論」（人間革命）から啓蒙主義の「主知主義の誤りを正され」「自己目的としての人格の尊厳を教えられた」、その強い影響の下に構築された（生松敏三『社会思想の歴史 ヘーゲル・マルクス・ヴェーバー——』 NHK 市民大学叢書 日本放送出版協会）。

\* 3 カントは、『純粹理性批判』の中で自らの認識論に影響を与えたヒューム哲学について「業績と課題」の観点から批判的に述べている、「ア・プリオリな総合判断はどのように可能であろうか」と自らの認識論を踏まえ、この課題解決に最も近づいたのがヒュームであった、が、彼の哲学は、「生じた結果をその原理に結びつけるという総合的命題だけにとどまりそれ以上にははいらなかった（岩波文庫 74頁）。

カントは、ヒューム哲学の原理は、「理性を一切の可能的経験の領域を超えて独断的に使用してはならない」ことにある（『プロレゴメナ』第58節 岩波文庫 238頁）、と指摘した上で、「ヒュームが、ついに思いつかなかった」のは、「悟性概念や自然法則は、経験から導果されるのではなく、逆に経験がこれらのものから導果される」「逆の連結のしかた」ことであった（『プロレゴメナ』第30節 岩波文庫 131頁）、批判したのである。

- \* 4 1762年夏、カントは、ルソーの『エミール』を読んだ、『エミール』は、有用なことを知るために「ソクラテスのように質問をする」考え方を説いた教育改革論を小説の形で展開した作品である、即ち「人間らしさ」（人間であること）を求めて近代文明の贅沢、腐敗を拒否する「人間論」（ソクラテスであれ）である。そのときの感動が大きかったことは、「規則正しい散歩を数日にわたって」中止したことに現われている（括弧内、引用者）。

カントの散歩コースは、「哲学者道」と呼ばれ、地域の人びとの話題となっていた（玉井 茂『カントの散歩 ―哲学者のティータイム―』勁草書院、浜田義文『若きカントの思想形成』勁草書房）。カントが散歩しているから、今は、午後3時だ、と思った、と言う。

## B、「二重の視点」に関する評論者（荒井）の問題点

カントは、『純粋理性批判』の中で、「人間の認識」の問題に触れ、以下のような説明をしている。

人間の認識には二つの根幹がある。恐らくこれらの根幹は、共通であるがしかし我々には知れない唯一の根から生まれたものであろう、この二つの根幹というのは、即ち感性と悟性である、そして感性によって我々に対象が与えられ、また悟性によってこの対象が考えられる（『純粋理性批判』 岩波文庫版 上）。

「唯一の根」とは、「認識主観」（カント：「統覚的自我」）ではないか？「我々には知れない」「唯一の根」とカントがいう根拠は、認識主観は対象化されない「思惟する形式としての『自己意識』」であるではないか？ 例えば 定立＝物自体（自由である）、反立＝現象（自由でない）の「二律背反」は、渡邊論文が提言する「ベクトルの違い」であって、両者は「共に真」である、とすれば「二つの根幹」としての感性＝「与える」と悟性＝「考える」を「共に真」と認識するのは、「唯一の根」である「考える私（Ich denke）」である、と解釈できるように思われる？ ハイデガーは、「唯一の根」を「構想力」と解釈する、――渡邊氏からのご教示であるが、とすれば「構想力」は、認識主観と考えられる。

## C、カントの批判哲学における「判断力」について

渡邊論文の主題である判断力の問題は、カント批判哲学に基づいた緻密な考察の上に立ち、以下のように結論付けている。

判断力が哲学二部門（理論哲学と実践哲学）を一つの全体へと総合する。

判断力は、「判断する力」「能力」のことである、「一つの全体」とは、如何なることか、考察したい。

第三の批判書『判断的批判』の「批判力」を示したのが、下に掲載した第三図である。二つの『批判書』で展開された理論理性と実践理性――「現象的存在に適用される理論的原理」と「可想的存在に関する実践的原理」の「総合」（新しい統一）である。

「判断力」には「快と不快との感情」が対応するであろう。かくして『判断力批判』が取り扱う「反省的判断力」は、目的論的自然観に関わる「目的論判断力」であるばかりでなく、同時にまた他面では、「自然美と芸術に関わる美的（＝直感的）判断力」であり得る（山崎正一『カントの哲学』）。

既に確認したが、判断力は、カントによって「理論理性と実践理性とを、新しい統一に結び付ける」ものとして示された、この説明に従う限り、カントが『純粋理性批判』で言及した認識主観＝「唯一の根」は、カントが試みた自然原理と道徳原理の「新しい調和（統一）」を意味している。

ところでアルセニイ・グリカは、「カント哲学の研究を直ちに『人間学』を読むことから始まることは目的にかなっている」とした上で、カントの著書を読むあり方を以下のように説明している。

『人間学』の次に、私は諸学者に対して『道徳形而上学』を読むことを勧めたい。この書物はカント学説のアルファでありオメガである倫理学と法理論とについて教える。その次に『判断力批判』を勧める。そこではカント哲学の全体系が基礎づけられ、美学が取り扱われる。そしてその後初めて『純粋理性批判』を読むのが良いであろう。『プロレゴメナ』と『実践理性批判』は最初は省略しても差支えない（西牟田久雄・浜田義文訳『カント その生涯と思想』法政大学出版局1983年）。

17世紀の太陽活動が衰退する「マウンダー極小期」に西欧近代は、経済、政治、文明の危機に陥った、その克服を試みた18世紀は、「人間の至高の力」と科学信仰の時代であった、と言う。

ドイツ啓蒙期にカントが発表し、——スピノザ主義（精神と自然の同一を説く＝同一哲学）から「認識主観の自由」はないと批判された『純粋理性批判』は、「人間とは何か」を考究した「人間学」であり、『プロレゴメナ』は、カントが構想する「認識主観の自由」の解説書であったとされる、とすればアルセニイ・グリカが提言する『純粋理性批判』と『プロレゴメナ』の読み方は、果たしてよいか、論評者としては、疑問である。

\* \* \*

カント哲学の「判断力」は、理論理性と実践理性とを新しい統一体として纏めることであった。即ち理論理性が構想する「自然の世界」と実践理性が所産する「自由の世界」は、区別（裂け目）されるが、両者は、相互に関連し「調和的統一」にある \* 5。

\* 5 個物が「神から生じた結果として」「時間においてのみ存在するならば」「存在者の行為も」「神がどこかでなした行為に過ぎない」とカントは、スピノザ哲学を批判し、根本思想の不合理を指摘する、他面個物を「最高原因の結果と認めながら」その（個物）活動は、「神及び神の行為には属さない」とする創造説より「はるかに合理的である」と言及する（『実践理性批判』岩波文庫、昭和38年版）。スピノザ哲学は、「神即自然」の決定論を展開する、が、「事物には自己の存在を維持する傾向、即ち自存性があると考えられ」、「政治および道徳の思想が展開される」（『岩波 西洋人名辞典』「スピノザ」）ことから、カント哲学の自然と自由の調和的統一説は、中世の神学批判に基づいたスピノザ説＝人間存在の肯定的な解釈の延長にある、とも考えられる。

### 第三図 判断力の役割 —— 哲学の理論的部門と実践的部門との「裂け目」を結合



「判断力は、自然に対して（自己自律として）自然を反省する、ために自分自身に対してあたかもあるかのような「合目的性」の原理を想定する、——反省的判断力である（渡邊論文）。反省的判断力は、「自然のうちに実質（質料）としての目的が存在しななくとも形式に関してあたかも（目的が実在する）かのように」表象する力である。

（カントの）「規定的判断力」とは、客観的質料を主観的形相によって規定する場合の判断機能をいうのに対し、「反省的判断力」とは、客観的質料が主観的形相に調和するとみなされ得る場合の判断機能を意味するものと解せられる。伝統的な形而上学が、「形相 — 質料」の概念で構想したものを、カントは「主観（形式＝形相） — 客観」の概念で認識論的に構想した（た、「コペルニクスの転回」である（括弧内引用者）（山崎正一『カントの哲学』東京大学出版会）。

普遍（規則、原理、法則）が与えられていて、その下に特殊を包摂する場合には、判断力は「規定的」判断力といわれる、しかるに特殊が与えられていて、それに対する特殊を見出さねばならない場合には、判断力は「反省的」判断力といわれる。『純粋理性批判』の「判断力の先験的理説」（「原理の分析論」）において論ぜられたのは「規定的判断力」であるが、『判断力批判』で論ぜられるのは、「反省的判断力」である（前掲書）。

カントは、第一と第二の『批判書』に「裂け目」を認めた、が、論評者は、同様に「理知の世界」と「現実の世界」にも「裂け目」がある、と考えている。カントが説くように完全な矛盾ではない、「理知と現実」世界は本質的に同一であり、現実の人間（認識能力を持つ理性的存在者）は、理知の世界を現実の世界に包摂する、調和的統一を試

みるのである（「コペルニクスの転回」である）。

カントが活躍した地盤（近代ヨーロッパ）は、啓蒙主義の主知主義であった、神的理性に反対する近代主義の出現である、カント哲学は、主知主義であるが、啓蒙的悟性主義を脱却して新たな悟性主義を展開した（『岩波 西洋人名辞典』「カント」）。（コペルニクスの転回である）（括弧内、引用者）。

西欧「マウンダー極小期」の「17世紀の危機」（政治、経済、文化に関わる危機）に「人間」を模索したデカルトの「考える私」をカントは、「叡知者としての私」（純粹で、実践的な理性者）として解釈した。

自己存在の、意識としての「考える私（Ich denke）」は、単なる認識主観ではなく、感性界と叡知界の二元論（客観—主観）を克服する普遍的な使命を持っていた。その意味でカントは、西欧近代市民の人間観の形成（新しい啓蒙的主知主義の形成）に大きな役割を果たしたのである。

18世紀西欧は、理知の世界と現実の世界を対立区分し理知の世界を理想とするプラトン二元論の矛盾的世界ではなく、自由の世界と必然の世界が調和的に統一された近代的市民社会（近代ブルジョア社会）でなければならない  
\* 6、カント哲学の根本命題である。とすれば、新しい啓蒙主義から眺めた西欧の近代を「文明以前」の社会と批判し、理念と現実を統一的に結合する実践理性＝「全自我の統一者」は、18世紀の人格的理性で、「自由と独立」の確立に情熱を燃やしていたカント（最高立法者）である。

\* 6 西田幾多郎は、ヘーゲルの弁証法と華嚴の論理との類似性を指摘する（『西田幾多郎全集』第14巻）、華嚴の論理——  
事事無礙法界のロジックは、現実と理想が克服された「一つの世界」（円融無礙）である、と説く。現実の世界は、「現象的立場から見れば事法界、無事性・空と言う本来的な立場から見れば理法界」とする「円融無礙」の世界である。カントの認識論にも共通する論理ではないか、論評者の解釈である。

「無の論理」というような構造をわれわれの心というものは持っている。そこによほど東洋的なものの考え方と西洋的な考え方の違いがありはしないかと思う」と西田は、「現実の世界の論理構造」（『西田幾多郎全集』第14巻）の中で指摘する、東洋の論理は、「主客未分」であり、西洋の論理は、「主客二分」と考えられるが、大乘仏教の『唯識三十論』は、「心の働き、認識する働き」（構想力）を「一切唯識」と定義することから、比較思想の観点から、—— かなり困難と思うが、カント哲学が説く「現実と理念」の調和的統一（構想力）との異同を吟味することも、価値ある研究と思う、「真理は現実のなかに存在する」命題の比較検討である（cf. 拙論「西田哲学と華嚴思想」『哲学と教育』第55号）。

日本に渡来した大乘仏教の教義（哲学）は、「① アビダルマ派 → ② 中観派 → ③ 唯識派」の教義（哲学）過程を辿って形成される。ヘーゲルの弁証法の定義に従えば、「有」→「無」→「成」、と考えられるのではないか。

#### ①「有」の哲学

世親が唱えたアビダルマ派の經典「アーガマ 阿含経」の教義「三世実有性」は、「縁起—諸行、無常—無我」を弁証する哲学である、「すべてが有る」＝一切有 sarvasti の哲学「三世実有性」によって「全てが無常であり、無我である」ことを論証したのである（桜部 健「無常の弁証」、『存在の分析<アビダルマ>』所収、角川書店）。

#### ②「無」の哲学

龍樹が宣言した「中論」を中核とした学派である、アビダルマ哲学が教説する「有の論理」—— 悟性的・分析的に説明する世界は、論理的に成立しない、と批判する——「実相ではない」とする「空の哲学」の展開である（桜部 前掲論文）。

ヘーゲルは、現実世界の「あらゆる運動」＝生成と消滅を統一する「成」を論理的に認めた（『小論理学』86節、87節補遺、88節補遺）、此の論理に従えば、ヘーゲル弁証法は、「現実世界のあらゆる運動」、「生命の原理」のことである（『小論理学』81節補遺）。が、龍樹は、ヘーゲルとは異なり「中論」において生成と消滅の「縁起性」を否定する（矢島洋吉『空の哲学』「ヘーゲルの弁証法の論理」、NHKブックス）。東洋と西洋の哲学的論理に違いがあり、比較思想の点から考察する価値があるのではないかと。

#### ③「成」の哲学

①と②の教説（哲学）を総合する論理—— アーラヤ識縁起説は、心の生み出した表象以外に、外界には何も存在しないと説明する、実在しないものを主観的に構想（仮設 けせつ＝遍計 へんげ）する「一切唯識」の原理が、アーラヤ識である（桜部 前掲書）。現実の世界にある一切の存在は「唯現象識」に過ぎないが、三世唯識としての「有、無、成」は、「識が、識を見る」ことである、——「主体としての識」が「客体としての識」を認識することから、西田哲学の「自分において自分を見る」場所の論理に、近似していると考えられる、のではないかと。

「構想力」（認識＝分別の働き）としての「阿頼耶識 アーラヤ識」は、「カントのいう意味で『純粹』とはいいたいにして

も……『純粹統覚』に近いではないか」と、荒牧典俊は、興味深い解釈をする『大乘仏典 15 世親集』『唯識三十論』の訳註 中央公論社、評論者としては、西田の「絶対矛盾的自己同一」の論理、ヘーゲル弁証法に近い論理ではないか、とも考えている、比較検討を試みたい。

### Ⅲ、結語

カントの「三批判書」は、17世紀のピュロン主義的な人間本位の生き方の流れを引き継ぎ、18世紀も「自己の幸福」を追求する倫理以前の状態と批判する、——ルソーの『人間不平等期言論』が指摘する「自然状態における人の自由を喪失」と、無関係ではあるまい。

「自分の理性の權威のほかにはどんな權威にも支配されない」と宣言する J・ルソーの「自然状態の文明人」論——「自由と独立」を人間固有の使命とするテーゼに感動し、「哲学革命」を試みたのである。

人間の、生活の基本方針が、格率である、「行為を規定する主観的原理あって、客観的原理即ち実践的法則から区別」される（『道徳形而上学言論』第二章 通俗的な道徳哲学から道徳形而上学への移り行き）。文明社会での、倫理の最高原理（実践的法則）をカントは、『実践理性批判』「根本法則」で論説した定言的命令（自己立法）である、と言う、「汝の意志の格率が同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ（引用者註：純粹理性の道徳法則「～せよ」とは、最高立法者としての純粹実践理性が設定した「普遍の形式」である。個人のみならず妥当する格率（主観的原理）が、同時に「一切の理性的存在者に例外なく妥当する」「実践的法則」＝定言的命令である（『道徳形而上学原理』第二章）（cf. 第一図「b」の説明）（ルソーが説く「一般意志と個別意志の一致」論<『社会契約論』>が、影響している、と考えられる）、——道徳の最高原理（道徳形而上学原理）は、「神に帰する」のではなく、自発的に決定（自己立法）する現実世界（18世紀西欧近代社会）の「理性的存在者」の「尊敬の感情」である、と強調している。和辻哲郎の解釈を以下に掲げておく。

この（純粹理性の）根本法則は理性の事実と呼ばれてよい。純粹理性がそれを通じて己を根本的に立法的なものとして示すところの、唯一の純粹理性の事実、それがこの法則なのである。他の語で言えば、理性すなわち自発性あるいは本来的自己が、その根源において自己規定的な働きであることを示すところの事実、それは法則なのである（括弧内引用者）（和辻哲郎 前掲書 第一部 前編「第一章 純粹実践理性の原理」）。

道徳法則は、「理性と意志とを有するあらゆる有限者に」「迫ってくる」「声」＝実践的理念であると強調する「現実的人間」（理性的人間）は、「批判書」で論じた認識主観ではなく、ルソーの人間論によって開眼し、18世紀ドイツの後進社会を「倫理以前」と認識し神学的道徳観と対決して、「哲学革命」＝「新しい啓蒙主義」を思索したカント自身である、偉大な哲学者が、「時代を創る」のである。

ところで文学史上に一時代を創ったと評価されるドイツの詩人シラー \* 7 は、「カント哲学に没頭し影響を受けた」が、ゲーテ \* 8 とも親交を結び（『岩波 西洋人物辞典』「シラー」）、協同して重要な「古典時代」を創った。ゲーテは、スピノザ「汎神論」（神即自然）の影響を受けたが、シラーと共に展開した「美学的ヒューマンニズムの思想」は、「カント美学の発展としてドイツ観念論の発展史上にも大きな意味を持っている」（『哲学事典』「ゲーテ」、平凡社）\* 9。

ともあれシラーに高く評価された『批判書』で探索された「判断力」とは、第一と第二批判書の「裂け目」を新しく統一する能力（カ）のことで、カント哲学の目的は、近代的市民の世界観・人生観（啓蒙主義）の新たな確立であった、と言える。カントは、『啓蒙とは何か』（1784年）を著し十八世紀を「啓蒙の世紀」と史的に位置づけている。

\* 7 17世紀の「マウンダー極小期」の人間観は、18世紀における近代的自我形成の基礎となった、「人間とはなにか」の人間論は、カント哲学の主題であり、「三批判書」によって論ぜられた、が、分離された知性と感性をシラーは、「美しい魂」によって克服しようとした（『哲学事典』「ヒューマンニズム」 平凡社）。シラーが強調する「美しい魂」は、カントの理性的な認識主観ではなく、生まれながらに持った「感受性」＝魂のことと思う。

\* 8 小説『若きヴェルテルの悩み』により、ゲーテの名は、「ドイツのみならず全ヨーロッパに広まった」と言う。論評者も岩波文庫版を若き日に岡崎市内の書店で購入し、蔵書の1冊となっている。

ヘーゲル研究家で愛知教育大学学長を務めた将積 茂先生は、学徒出陣で大東亜戦争に従軍した軍歴を持つ、野間 宏の小説『真空地帯』は、陸軍連隊の内務班で精神的・肉体的な制裁が日常的に行われたことを書いているが、将積先

生の短歌集『紙ヒコーキ』（非売品）に詠われた短歌の中には、『真空地帯』の事実が詠われている。

営庭に消灯ラッパ鳴り渡り「自分」を脱ぎて兵は眠りし

戦闘を目的に「全体」として行動する軍隊では、「自由」、「自己」主張はご法度である、自己を立てれば、内務班では下士官の鉄拳が飛ぶ、野間の言葉を借用して言えば、軍隊生活は、精神的「真空」であった。カントが提唱する『永遠の平和のために』の世界から見れば、「文明以前」の原始的人間社会ではあるまいか。

手に握るペンを銃に代え「還ることの無い」戦いに臨んだ先生であったが、歴史的「運命」により「帰還」することが出来た、「昭和戦争史」を歩んだ帰還兵——歌い人：将積 茂が、「真空地帯」から帰還し、「自分」を取り戻した、その一歩が、『ヴェルテル』を読んだことであった。「自分」を取り戻した歌が、こう詠まれている。

本に飢えし兵は 還りて 焼け残る市の図書館に『ヴェルテル』を読む

焼け残った豊橋市の図書館で手に取った先生の最初の本は、ヘーゲルの著書ではなくゲーテの『若きヴェルテルの悩み』であった。ヨーロッパだけではなく日本の若い青年にも広く読まれた一つの証である。

\* 9 ドイツの哲学者エルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer) は、自著『ROUSSEAU, KANT, GOETHE ルソー、カント、ゲーテ』「ゲーテとカント哲学」(1945年刊)(原 好男訳 訳題『十八世紀の精神 ルソーとカントそしてゲーテ』思索社1989年)の中で、ゲーテについての論評を以下のようにしている。

十八世紀の精妙な性格付けをした著作の一つである『ヴィケルマンとその時代』と言う論文において、ゲーテは、いかなる学者もカントによって始められた偉大な哲学の動向を安易に拒み、反対し、軽視することは出来ない、と述べている。これは学者だけではなく芸術家にもあてはまる。カントの思想にまったく影響されなかった芸術家はほとんどいなかった。しかし、かれらはそれぞれ、カントに新しい異なった光を当て、自分の展望のなかでカントを見たのだった(思索社)。

\* \* \*

渡邊論文が提唱する「二重の視点」の解釈に関わる『純粹理性批判』と『実践理性批判』は、大学の講義で学んだ、今振り返ってみると、ソクラテスのような問題意識(問い)を持たず、右耳で聴き左耳に突き抜けた不勉強極まりない学生としての姿勢であった(「やせたソクラテス」とは無縁であった)。カントが、「人間とは、なにか」の人間論を基本的なテーゼとしたように、哲学は、「問い」の学問だ、とする学的基本の欠如が悔やまれる、

ともあれ渡邊論文が、論じたカント批判哲学の「二重の視点」を論評者の理解した範囲であるが、解釈の正当性を棚に上げて纏めておきたい。

## < 渡邊論文の纏め >

カントの批判哲学が試みた新しい形而上学の「二重の視点」(コペルニクスの転回)について

### I、「理念の世界」における「二重の視点」

- ① ヒューム、ルソーから学び「十八世紀西欧の啓蒙主義を批判 — カント哲学の新しい啓蒙主義の提唱」(コペルニクスの転回)
- ② 『純粹理性批判』で採り上げた「自然の世界」の「感性(素材の受容性) — 悟性(認識主観の自発性)」
  - ・感性と悟性を結合する規定的判断力は、構想力の作用において成立する。
- ③ 純粹理性と実践理性の対象である「自然の世界 — 道徳の世界」
  - ・「自然の世界」=規定的判断力      ・「道徳の世界」=反省的判断力

### II、十八世紀西欧市民生活の「現実の世界」のあり方に見る「二重の視点」

- ④ 現実的人間の生活を規制する「格率 — 道徳法則」(現実界 — 理念界)
  - ・現実世界での個人的行動の「格率」を道徳法則と一致(自己立法)させる
  - ・「理念」の世界と「現実」との調和的統一

\* 補足

α ヘーゲルが、『法哲学』で論じている「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」は、  
理性的なもの＝「自由」の思想、現実的なもの＝十八世紀近代ヨーロッパの世界を表現した命題、—— 新  
しい啓蒙主義における「理性と現実の統一」の象徴である、のではないか。

β ヘーゲル哲学の「反省論」の構造 —— 「外的反省」「規定的反省」

(岩佐 茂・島崎 隆・高打 純偏『ヘーゲル用語事典』 未来社)

- ・外的反省 …… 認識主体と対象が外的に分離している、と捉え主体が対象に働きかける段階
- ・規定的反省 …… 外的反省の分裂を克服し、規定的反省の統一に帰った状態

(カント哲学の影響 ?)

欲望の充実を最高目的とした経済の発展を念頭に置き、一国中心主義(国家利益)を国是とする21世紀の「今」、  
「人間とはなにか」を問い、「認識主観」(Ich denke 人間論)を批判的に追及したカントの「哲学の革命」から見  
れば、「理念」が忘却された「負」の人間生活である。ドイツの哲学者で新カント主義勃興の先駆けとなったリー  
ブマン(Liebmann 1840~1912)は、著書『カントとその亜流』(Kant und die Epigonen 1863年)の中  
で“カントに帰れ”(Zurück zu Kant)と批判的精神の復興を強調したが\*10、「人間性」を忘却した「今」、  
人は、リーブマンのように“カントに帰れ”と叫ぶべきではないか。

\*10 “カントに帰れ”にはじまり、誕生した新カント学派に採用されたカントの批判哲学は、近代的な認識論 —— 知  
識哲学中心主義として主張された(cf. ハイデガー・桑本 務訳『存在と時間』岩波文庫中)。

\*10 西田幾多郎は、新カント学派を参考として持論を展開しているが、自著『自覚に於ける直観と反省』(改版の序)  
の中で、以下のように説明をする。

私の思想の傾向は『善の研究』以来既に定まっていた。その頃リッケルトなどの新カント学派を研究するに及んで、此の派に  
対しどこまでも自分の立場を維持せんとした。価値と存在、意味と事実との峻別に対して、直観と反省との内的結合たる自覚の  
立場から両者を総合統一を企てた。その時、私の取った立場はフィヒテの事行に近いものであった(かな使いは、現行の表現に  
改めている)(『西田幾多郎全集』第二巻)。

『善の研究』の「純粋経験」が、フィヒテの「事行」に近い、と西田は、説明する、西田によれば、「純粋経験」は「直  
観」(=ベルグソンの「純粋持続」説。沢瀉久敬『アンリ・ベルグソン』「純粋持続の立場は、純粋な自我の立場」中央文庫)と「反  
省」(=リッケルトなどの「新カント派」説)を総合する「自覚」である(cf. 西田とベルグソンの学的関係は、『思索と体験』(『西  
田幾多郎全集』第一巻)。

「純粋経験」の理論化は、「あくまで直観 —— ベルグソンが『主』であって、反省 —— 新カント派が『従』であった」、  
と指摘した上で、ヘーゲル研究者として著名な船山真一は、『自覚に於ける直観と反省』の理論的立場が、『善の研究』  
よりも「いっそう発展している点は反省にある」と指摘する。(船山真一『大正哲学史研究』法律文化社)

渡邊氏の「二重の視点」で貫かれたカント研究は、「断じて行えば、鬼神もこれを避く」(Firm resolution sends  
even a demon flying)と「諺」が教示する探求的な有り方である、—— 年老いた論評者も「斯く有りたもの  
だ」と胸に刻んだことを記し、拙い「評論」を終わりたい。

渡邊論文 哲学会誌『哲学と教育』第65号 (2017年)に掲載